

詩を通して時代と生き方を見つめる目

佐相憲一

一 詩選集に続いての待望の詩論集

今年二〇一〇年の二月下旬に刊行されたコールサック詩文庫『くにさだきみ詩選集一三〇篇』は九月上旬の現在に至るまで、詩の世界に大きな反響を呼んでいる。好著が広く読まれることはご案内したこちらとしても喜びであるが、初めてこの詩人の詩世界に触れた読者だけでなく、日頃著者と詩運動をされてきた方面からもあらためて新鮮な読後感が寄せられた。詩選集という本の性格が幸いして、初々しい書き始めの頃からバリバリの現在まで、詩人くにさだきみ氏の歩みがまるごと伝わったからである。

こうなつてくると、自然と次なる要望が詩の世界から出てくる。「では、この類まれな詩人の詩論・

評論・エッセイはどんな感じなんだろう。」

というわけで、詩選集の話題も尽きないうちに、ここに、くにさだきみ氏の評論エッセイ集をお届けする。

「またしても！」のこのボリュームに今度こそ本当にノックアウトされるかもしれない。

どうかりラックスしてページをめくってみていただきたい。きつと、人間くにさだきみ氏のざつぱらんな面白さなども発見できるから。

二 誠実な詩鑑賞者としてのくにさだきみ氏

詩論集の巻頭は「風鈴の音色」だ。これは追悼文の域を超える名文だと思う。岡山が生んだ詩人、三沢浩二（信弘）・坪井宗康との学生時代の交流が、生き生きと、淡い詩情をたたえて、印象深くこちらに伝わってくる。この一篇だけでもこの本を買う価値があるような、詩史に残すべき貴重な文章だと私は思う。

マラルメを「ええぞ」と言つて芸術性の高い「未

来的な新しい詩のための、強固な基礎」をめざし、抒情の質を追求していた「ミサくん」。マヤコフスキーを愛読しながら、「近代的な個人主義そのものからの脱却」をはかり、おそらくは地に足をつけた方向を追求していった「ツボくん」。そして「フランス語もドイツ語もチンプンカンプン」の素朴な女学生たる我がが作者。

詩的に刻印される図書館のシーンや夏の日の海水浴シーンは深い。海でのミサくんの言葉が作者の胸に刻んだものは半世紀後にも鮮明だ。「なあ本当に永遠に浸つとるみたようならうが」。そして、作者は静かに熱く回想する。親しみと反発の入り混じった青春の感覚はすでに良き思い出に変わり、作風が違いながらも本当は先輩のような感じで内心感心していた詩人・三沢氏の詩精神の真髄は、あのいっしょに海につかった日の彼のセリフにあったのだ。彼女の目は二人に共に優しい。

ツボくんとミサくんの思想の違いが印象深い別の日の論争目撃談も味わい深いし、岡山のもう一人の名詩人・井奥行彦氏の若い頃の印象もい感じて回想されている。

私はこの名随筆文を読みながら、一九五〇年前後の岡山の学生たちの情景にタイムスリップしていた。そして、働きながらいっしょうけんめい勉強して優秀な男子生徒たちに負けないようにと努力する一女学生、詩文学への入り口でさまざまな刺激を受けて目を輝かせる、好奇心旺盛で魅力的な一女学生の気さくな姿が想像されるのである。まさに、詩人くにさだきみ氏の原風景を見る思いであった。

この名文を皮きりに、この本には詩人が大勢出てくる。

第一章・第二章・第四章では、黒田三郎、黒田喜夫、高良留美子、吉野弘、城脩、新川和江、石垣りん、茨木のり子、上手幸、三浦健治、宮崎清、浅尾忠男、山之口貌、峠三吉、栗原貞子、片羽登呂平、奥田史郎、松田研之、近野十志夫、瀬野とし、清岳こう、大塚欽一、香山雅代、北畑光男、崔泳美、佐川亜紀、有馬敏、辻井喬、松尾静明、北川朱実、永塚幸司、島田陽子、なたとしこ、大久保せつ子、山本聖子、浜田知章、大崎二郎、村野四郎、北川冬彦、関根弘、三好達治、草野心平、壺井繁治、真壁仁、

佐藤栄作、福中都生子、花田克己、豊岡史朗、相沢史郎、森田進、木島始、滝いく子、山本倫子、伊藤桂一、津坂治男、栗和美、菅原克己、井元霧彦、秋山基夫、高田敏子、なんばみちこ……ほか多数（敬称略）。

第三章のじっくりと一人一人を論じた書評では、中正敏、草野信子、長嶋南子、池澤眞一、青島洋子、葵生川玲、柴田三吉、赤山勇、芝憲子、沖長ルミ子、黒羽英二、金光洋一郎、山岡和範、岡隆夫（敬称略）。

中でも「芝憲子——反戦・反権力の詩人」（第三章に収録）は特にすぐれた詩人論であるように思われる。私自身、この沖繩在住の詩人とは詩運動でこいつしよしているが、あまり直接的な交流がなく、人物像などはよく知らなかったから、これを読んで新鮮な納得があった。平和運動と詩を結ぶこのすぐれた女性詩人の幅広い文学背景なども読者に新鮮な関心と呼ぶだろう。

同じ女性だからだろうか、ほかにも女性詩人を論じた論考に、より光るものがあった。「女の直感」

詩人たちの歴史認識、社会の中の生き方、などにも光を当てている。とりあげている問題を具体的に挙げると、「核廃絶問題」「アメリカの原爆」「日本の侵略戦争」「女性の戦前戦後」「詩人の戦争協力問題」「教育現場での君が代強制問題」「自殺や他殺に見る社会の中の人権感覚」「昭和の時代の生きざま」「二十一世紀のアフガン・イラク戦争と日本のあり方」などである。

その角度は鋭く、これらの問題ですぐれた形象化をしている他者の作品を紹介しながら、それに共感する形で、くにさだ氏自身の論も展開されるのである。その中で、書く者の心構え、生き方、スタンス、のようなものが繰り返し提起されていることに読者は思い至るであろう。

日本の現代詩にこれまであまり縁のなかつた読者の方々にここでお伝えしておきたいのだが、くにさだ氏がこうした平和や人権や歴史や労働についての詩人の姿勢を力説する背景に、現代詩において、社会的な要素が軽視されるようになっていたという重大な問題があるのだ。

というのだろうか。人間的に女性詩人の本質をまるごとつかんでいるようだ。

「女の直感」は男性陣にはちよつと厳しい目も見せるのだが、それはくにさだ氏流の愛情表現なのかもしれない。もちろん、男性陣の詩業にも的確に特長を見出しているものも多い。たとえば、「金光洋一郎論」などには抜群の人間味があつて、共感する。

また、リアリズムバリバリのくにさだきみ氏が、三好達治の抒情や、村野四郎の寓意的暗喩や、島田陽子氏のシュールで鋭いグローバルな生き物のうたなどを高く評価しているのを読むと、ほつとしてうれしくなる。

くにさだ氏をナビゲーターに、この本を通じてさまざまな詩を鑑賞することができるのだ。

三 社会認識を問う論客くにさだきみ氏

第一章、第二章の諸論を通じてくにさだきみ氏は、

それは一九八〇年あたりからの日本政治の大転換、社会全体のいわゆる右傾化という流れとも大いに関わりがあるだろう。詩人たちにもその時代の空気が微妙に影響して行つたように見える。

それで世の中が良くなったのなら話は別だが、その行き着くところは現在の日本社会のどん底状態である。経済も政治も社会も混迷を深めている。

社会的なことや政治的なことを詩にしたり、発言行動したりする詩人の方が少数派になつていった時代である。そのただ中に、この本に収録されているくにさだきみ氏の詩論を置いてみてほしい。流されていく時代に抵抗する知的良心としての輝きを放っていると感じられるのではないか。そして、ここにとりあげられた詩人たちの貴重な仕事、しっかりと詩史に残る力にもなっているのではないか。

「生きた化石」ならぬ「化石を拒む生きもの」の人権パワー、生活連帯パワーが詩文学を語る中にもみなぎっている。語りまくるこの論客に、中味のあつた切実な詩運動へのエールが寄せられることを願う。その機運が、春の『詩選集』の好評にも感じられる今日この頃である。

最近では、先ほど述べた現代詩の風向きもまた劇的に変わってきて、社会的な問題にとりくむ詩人も増え、注目されてきている。いわゆる芸術至上主義的な作風のすぐれた詩人たちの仕事と共存・相互尊重する新しい形で、くにさだ氏はその意味で先駆者でもあるのである。

四 エッセイが伝える人間くにさだきみ氏の素顔の魅力

第四章のエッセイ群にはくにさだ氏の日常の素顔もよく見えて、人生的に共感したり、ユーモアに親しく笑ったり、ほのぼのとさせられたり、しんみりとさせられたり、怒りを共有したりすることができ

る。たとえば「酒のみ」は、のんべえの病的な電話に関わった逸話であるが、この不幸な人の嘆きの辛抱強い聞き役になりながら、譲り受けた猫の印象深い話が詩的に刻印されている。人生のペースが行間

しく伝わる。

「アーツアーツアーツ」は岡山方言の中のさらに細かい地域表現の違いへと興味深くいざなっていく。愉快地なエッセイだ。一九三〇年代の総社周辺の人々の生きた話し言葉も再現されるようで、貴重な証言ともなっている。この作者にはこういう語りの才能もあるのである。

この四章からは人間くにさだきみ氏の生活感が伝わってくる。

五 現代を生きぬいてきた人のしなやかな言葉

略歴年表にもあるように、彼女はコミュニケーションにある。それも長年教師としてこどもたちとじかに交流し、その後は地方議員を地道につとめた、地域住民に愛される活動家である。「みんなに親しまれるおばちゃん政治家」として大活躍してきた行動精神は、彼女の詩文学の根底にあるヒューマニズムと、人間社会の現実を見つめる鋭さを形成したと思うが、

ににじむ。

「骨董飯」の自身の創作に関するおしゃべりは面白い。ああでもないこうでもない謙遜しているがこの一風変わった語り自体が文学的な機知に富んでいると言えるだろう。

「三人の母」は詩人くにさだきみ氏の人生背景を知る上でも貴重な研究資料にもなるし、自分自身のころのカミングアウトとしての切実性がある。特別の親しみを覚えるエッセイである。産みの母、養育者としての母、父の再婚相手としての母、の三人の母の作者の中の姿が述べられる。そのイメージの総体を「屈折」として表現しているが、その屈折そのものが、人の絆の真実の何かを表していると思う。

「馬鹿の風邪」では風邪を自然治癒力で撃退する作者の超人的たまご酒パワーに圧倒されるし、「夫の買物」ではこの一夫婦のユーモラスな「あ・うん」の呼吸と、主婦としての作者のたくましさがある。だから、くにさだ氏が時にかたくなに「リアリズム」にこだわるのは、侵略戦争と絶対主義的天皇制の暗黒時代のプロレタリア詩人のリアルな批判精神を継承し、戦後詩の客観性や告発性に連なろうとする文学的な善意から出ているものなのだ。そういう歴史的文脈で読むことが大切だと思う。

もちろん、現代詩はプロレタリア詩とモダニズム詩の双方を、あるいは細かくはさまざまな傾向の詩精神を発展的に受け継いだものを土台としており、厳密な狭い意味での「写実主義すなわちリアリズム」だけがすぐれた詩だなどとはくにさだ氏も言っていないであろう。彼女が尊敬している故・黒田三郎はリアリズムという言葉の中にシュールレアリスムも含めてそれを評価していたし、モダニズムの繊細な表現の影響だって受けている。そういう「広い意味でのリアリズム」、現実を見る眼の大切さを言っているのだと解釈されたい。そしてそれはこの激動の時代にとっても大切な眼である。

それだけではなく、そもそもくにさだ氏は元祖「ぶつとび系」の面白い人だ。それは『詩選集』の中のアヴァンギャルドとも言える詩作品「けだもの考証録」「胃袋同盟」「わたしは女」などにも存分に発揮されていたし、この詩論集でも、「目次」の各タイトルを見るだけでクスクスと笑ってしまうものが散見されることからおわかりいただけると思う。

現代詩の中で社会的な傾向の批評性がだんだん軽視されるようになってきたいま、くにさだ氏の視点は重要なものを投げかけている。ここに紹介された詩人たちの仕事はそのような社会的な視点をもっている。

途中執筆中断の時期をはさんではいるものの、約五十年にわたり論じられてきたこれらの結晶をこうして一冊にまとめて見渡すと、そのことがあらためて実感される。

一九三二年生まれという背景の中で、戦争をくぐりぬけただけでなく、男尊女卑の傾向が著しい時代に自立した女性として、また働く女性として、あるいは政治行動まで果敢にする女性として、この人の存在は同世代の人たちの中で最先端の輝きを放って

きたと言えるよう。そのような生きた存在が詩文学を語る言葉には、激動の歴史の生身の実感がこめられている。

一九四五年夏の原爆と終戦とそこからの新しい社会と戦争の傷跡、一九五〇年代の朝鮮戦争や革新陣営分裂の暗い世相、一九六〇年代の平和運動・時代変革の機運の高揚と「高度経済成長」の影、一九七〇年代の住民自治運動の高揚とさまざまな社会変化、一九八〇年代の世界の激動と反核運動、デジタル化の波と教育の荒廃、一九九〇年代の経済危機と社会の閉塞感、そして二十一世紀の戦争と反戦非戦のせめぎあい、地球規模の環境問題など、おおよっぱに見てもそのように緊迫した「戦後」「現代」という時代の変遷。

くにさだきみ氏はその中でたたかい、連帯し、告発し、泣き、笑い、生活してきた、生きた詩人であり、論客である。母親であり、妻であり、住民であり、個人である。

まだ『詩選集』を読まれていない方は、ぜひこちらもお読みいただきたい。

くにさだきみ詩論集『しなやかな抵抗の詩想』 栞解説文

佐相憲一

コールサクク社

2010